◉ルポルタージュ

伝統と近代の狭間

——大興安嶺オロゲヤ・エヴェンキ族の「移住」——

祁　玫

はじめに

二〇〇三年八月に、大興安嶺オロゲヤ・エヴェンキ族（中国語表記：「敖鲁古雅・鄂温克族」）自治郷の移住が、「生態移民」、「トナカイと森を出た最後の狩人」、「引越し好きな民族が永久定居へ」など、読者・識者の関心を引き付けるさまざまなフレーズや表題で報道され、それまで世間にほとんど知られていなかったこのマイノリティグループは一時期あたかも中国メディアの寵児のようだった。さまざまな報道の中で、とりわけ「トナカイが倒れ、狩人が一日で山へ」という記事は筆者の心を捉えた。というのは、筆者は「中国騎馬民族における喫茶習俗の歴史と現状」という研究プロジェクトの準備として、二〇〇二年の夏にこの自治郷を訪れたことがあり、その時移住の話題にいく度か遭遇したため、以来この問題に関心を持ち続けてきたからである。

人口二万人余りを有するエヴェンキ族は、五五を有する中国少数民族の中で、とりわけ人口の少ない民族である。エヴェンキ族は中国内モンゴル自治区をはじめ、黒龍江省、新疆ウイグル自治区、さらにロシア、モンゴル国に及ぶ地域に、国境を越えて生活している。「ソロン」、「ツングース」、「ヤクート」とも呼ばれたこの民族は絶え間ない移動の結果、今日の「広く分布し、所々集中している」（「大分散、小聚居」）という状態を形成した。

「エヴェンキ」とは「大きな山に住む人々」を意味する。一九五七年末に、中国政府は彼らの意志に基づき、彼らの自称を用いて独自の「エヴェンキ族」として認定した。現

在、「ソロン」と呼ばれるグループが最も多く、牧畜業と農業に従事している。「ツングース」と呼ばれるグループはおよそ一五〇〇人で、牧畜業に従事している。「ヤクート」[1]というグループはわずか二三二人で、大興安嶺「オログヤ・エヴェンキ族自治郷」に集中している。

二〇〇三年夏に話題になったエヴェンキ族の移住はまさにオログヤ・エヴェンキ族自治郷に集中する「ヤクート」グループのことを指している。このグループは中国少数民族の中で狩猟とトナカイの飼育で生計を立てている唯一のケースとして、銃による狩猟生業が中国政府に認められている。そして、エヴェンキ族の中でもとりわけ特別な存在とされ、しばしば「狩猟エヴェンキ」、「使鹿エヴェンキ」(トナカイを飼い馴らしているエヴェンキ)とも呼ばれている。この文章では「狩猟エヴェンキ人」を用いてこのグループを示しておく。

このグループは彼らの狩猟とトナカイ飼育という生業を依存する山を下り、「定住区」という新しい世界に本当に身を委ねるのか。本稿は二〇〇二年夏に彼らの村を訪れた時の見聞を通して、このグループの抱えている問題を明らかにし、伝統と近代の狭間に喘ぐ中国少数民族の在り方を考えたい。

一　オログヤ・エヴェンキ族自治郷

(一)　二〇〇二年夏のオログヤ・エヴェンキ族自治郷

北京発ロシア行きの国際列車は三二時間走ると、内モンゴル自治区ホロンバイル盟の根河市という林業の町に着く。オログヤ・エヴェンキ族自治郷はこの根河市に所属する。根河から北へのローカル列車に乗り換え、大興安嶺の原始林の中をさらに八時間走ると、マンキ(満帰)という駅に辿りつく。エヴェンキ語で「一人のモンゴル人が見えた」を意味するこの駅から車でさらに北へ一時間ほど走ると、オログヤ自治郷が目の前に現れる。ここから中国最北の町であるモハ(漠河)まではわずか一〇〇キロしかない。

エヴェンキ語で「ポプラが茂るところ」を意味するオログヤ自治郷はその名の通り、オログヤ河と高いポプラや白樺に包まれた静かな村である。村に入ると、まず目に映るのは一〇メートルもある白いトナカイの像である。トナカイは狩猟エヴェンキ人の民族的シンボルで、とりわけ、白いトナカイは珍しく、「神の鹿」と言われる。村は深い林に位置しながら、役場をはじめ、銀行、郵便局、学校、病院、博物館などの公共施設が整い、各家庭にはテレビ、電話が取り付けられ、近代的な町の顔を覗かせている。中国の民

族学者である呂光天氏は、一九六〇年代に行った調査報告で、原始父系社会であった狩猟エヴェンキ人は野獣の皮を身に纏い、松や白樺で作られた円錐形テント「ツウォロォズ」（撮羅子）の家を持ち、冬には二、三日、夏には一五日間にも及ぶサイクルで常にトナカイを伴って移動生活を営む、「引越し好き」な民族だと記述している。二〇〇二年の夏にオログヤ自治郷を訪れた私の前には、トナカイもいなければ、猟銃もなく、町づくりから人々の衣服、暮らしぶりまで、一見したところ外の世界とあまり違わない風景があった。あえて自治郷の特徴を強調するならば、村は中国の都市の持つ喧騒と農村のみすぼらしさのいずれもなく、どこか日本の風光明媚なリゾート地に似ていた。

(二) オログヤ・エヴェンキ族自治郷の生い立ち

先に述べたように、二〇〇三年夏のオログヤ・エヴェンキ族自治郷の移住は中国のマスメディアを賑わしたが、実は、この風光明媚な自治郷は彼らが先祖代々住み慣れてきた歴史ある故郷ではないのだ。オログヤ・エヴェンキ族自治郷が成立する以前に、彼らはすでに半強制的な移住を経験させられていたのである。

中華人民共和国が成立した時、狩猟エヴェンキ人は大興安嶺オルグナ川流域の「キカン」（奇乾）という中ソ国境地域に生活していた。一九五七年、内モンゴル自治区人民政府の承認の下で「キカン・エヴェンキ民族郷」が成立した。中国政府はキカンに、三一世帯、一七〇人の狩猟エヴェンキ人のために「人工的」な定住村を建設したが、定住生活を営んだのは八世帯にすぎなかった。一九六〇年秋には定住は一八世帯に増えたが、狩猟に慣れた狩人と放し飼いに慣れたトナカイは結局定住生活に適応できなかったため、六二年には一三世帯に減った。一三世帯のうちでも郷長と物資調達屋の店長二人を除き、他は村に家屋を持つだけで、実際は森の中で狩猟しながら移動生活を送っていたのである。

狩猟の民の試練はこうした定住政策だけではなかった。中ソ対立が公然化した一九六〇年代に入ると、国境に近すぎる彼らは国防上好ましからぬ存在となった。このため、一九六五年に、中国政府は国境から離れたところにあるマンキへの移住を決定した。この年の九月、マンキに新しい自治郷の郷政府が設置され、キカンにいた一七〇名の狩猟エヴェンキ人はマンキ近くの「オログヤ」へ移動させられた。一九七三年、郷政府も「オログヤ」に移り、自治郷の名前は正式にオログヤ・エヴェンキ族自治郷に変更された。

キカン民族郷と同様に、オログヤ・エヴェンキ族自治郷の定住も当初は芳しくなかった。というのは、大部分の狩猟エヴェンキ人は中国政府の建てた住宅を会議や病気などで下山する時に利用し、それが終われば、また森へ戻って

いたからである。しかし、一九八〇年代以降、狩猟の衰退、トナカイ飼育者の減少、さらに若者の生活様式の変化などに伴い、定住は狩猟エヴェンキ人にも受け入れられるようになった。現在、自治郷に木材工場、鹿茸加工工場、老人ホームなどがあり、大多数の狩猟エヴェンキ人は国家幹部、医師、教師、工場労働者、銀行員などになり、定住生活を営むようになっている。

また、この村に住んでいる二〇〇人余りの狩猟エヴェンキ人のほか、結婚などの理由で、ロシア、モンゴル、ダフール、「外来エヴェンキ」、漢民族などが増えた結果、多民族的構成へと変化し、計五六〇人に達している。こうした多民族的構成に伴い、日常生活におけるコミュニケーションもエヴェンキ語から中国語（漢語）に変わった。ただ依然三〇名ほどのエヴェンキ狩人は、この村に設けた家に住まず、村の周囲五〇―一〇〇キロの範囲内にある原始林に四つの拠点を作り、狩猟とトナカイ飼育という移動生活を続けている。

㈢　オログヤ・エヴェンキ族自治郷の移住

オログヤ・エヴェンキ族自治郷が成立してから、狩猟エヴェンキ人は少数民族として住宅・医療・教育・老人ホームの無料化をはじめ、食料供給の補助、就職の斡旋、一人っ子政策の適用除外など多方面に及ぶ優遇措置を受け、基本生活は国からほぼ保障されていると言っても過言ではない。一方、改革開放時代に入ってから、自治郷では国からの「優遇」だけではなく、自らの手で村を振興しようという機運が高まってきたことも事実である。とりわけ、彼らは狩猟エヴェンキ民俗観光という「文化開発」に力を入れ、狩猟エヴェンキ博物館と民芸品店を作った。しかし、交通の不便さと、売りものであるトナカイがいないため、この文化開発は多くの観光客と投資者を引き寄せることはできなかった。

困り果てた自治郷に一九九九年に「再生」のチャンスが訪れた。この年、人口一〇万人以下の少数民族を支援する補助金計画を打ち出した中国政府の政策に呼応して、根河市政府はその補助金を使ってオログヤ郷全体を「移住」させようと考えた。すなわち、交通の不便な自治郷を開発するより、都市に近く観光開発が行いやすいところに全く新しい自治郷を作る、という発想である。二〇〇二年夏にオログヤ自治郷を訪れた私が「村民はどう思うか」と郷長に聞いたところ、「皆は大歓迎ですよ」という答えであった。考えてみればそうかもしれない。前記のように、自治郷に住んでいるエヴェンキ人は「定住」生活に慣れ、「狩猟」は単なる「記憶」となりつつある。同じ定住生活をするなら、こんな森の奥より、医療や教育レベルが高く、仕事のチャンスが多い町、都市の方が良いに決まっている。

二〇〇二年五月、自治郷移住の可否について、森で狩猟生活を続けている人たちを含めて一八歳から六〇歳までの村民たちは無記名投票を行い、ただ一票の棄権を除き、全ては賛成という結果となった。これで三八年間の歴史を持つ自治郷はオログヤの地を離れ、根河市の郊外に移ることが決まった。彼らは新しい自治郷において国から無料で、よりモダンな生活施設を貰うことができるが、同時にこれまで認められた狩猟用の銃を政府に返還するという「対価」も支払うのである。新しい自治郷でトナカイの飼育場を作り、いままで原始林の中に放し飼いにしていたトナカイをそこに入れ、観光ビジネスの目玉にしようと自治郷政府は企画している。彼らのこうしたプランを聞きながら、少数だがそれこそ狩猟エヴェンキ人の伝統を引き継ぎ、ずっと森で移動生活を営んでいるあの数十人の狩人たちは本当に迷いなく森を出る決心をしたのだろうか、と思いを馳せた。

私の気持を察したのか、自治郷郷長は次のように慰めてくれた。

「せっかく自治郷まで来て下さったのに、わざわざ山に行かないとトナカイが見られないのは申しわけないね。今度来る時には、もうこんな遠いところまでこなくても、新しい自治郷の飼育場でトナカイが見られるよ」。

二　トナカイと狩人

(一)　孟貴一四支の訪問

オログヤ自治郷に別れを告げた後、私は森で移動生活を続けている四つの拠点の一つであり、トナカイの数が一番多い「孟貴一四支」へ行くことにした。

同行してくれた通訳のバトさんは小柄な四〇代の男性で、中国共産主義青年団（共青団）オログヤ郷委員会の書記という肩書を持つ。共産党はこんな山奥でも、その組織の根を下ろしていることを感じさせた。実は、民族区域自治の一つの象徴として、中国の民族区域自治法は、（自治区、自治州、自治県、自治郷など）各レベルの自治区域の首長は少数民族出身の人でなければならないと規定している。このため、中国政府はこれまで十以上の民族系大学をはじめ、さまざまな形で民族幹部の養成に力を入れてきた。オログヤ自治郷の古香連郷長もバトさんも新中国が育てた少数民族幹部である。

孟貴一四支への道のりは決して楽なものではなかった。四輪駆動車はでこぼこの泥道を四時間も走らなければならなかった。あたりは一九八〇―九〇年代に経済開発ブームで森林の伐採が大々的に行われ、一時大変な賑やかさであっ

たが、近年中国政府による原始林保護プロジェクトが始まり、森は本来の静けさに戻りつつある。確かに、孟貴一四支まで走っていた間に、車はもちろん人間にも、わずか二人の山林保護労働者を除き、一切出会わなかった。

(二) トナカイの風景

四時間もかかった悪路の旅の末、目の前に現れたのは、きらきらと燃え上がる篝火の近くで、数十頭ものトナカイが悠々と草を噛み、その周囲にそれぞれ百メートルほどの間隔で三つの簡易テントが立てられている、という景色であった。森、篝火、リズミカルに流れる渓流、そしてトナカイ。その風景は幻想的にすら思えて、初めて本物のトナカイを見る筆者は思わず息を呑み、このメルヘン的世界にしばらく耽った。

日本では「サンタクロースのトナカイ」というイメージが強いこの動物は、中国語で「馴鹿」と呼ぶ。色は普通灰褐色で、頚は白い。体長は約二メートル。雌雄とも美しい角を持っているため「角鹿」とも呼ばれる。トナカイのもう一つの俗名である「四不像」(四つのどれとも似ていない)はこの動物の姿をよく言い得ていると思う。『吉林通志』の「食貨志」によれば、「四不像とは、足は牛に似て牛ではなく、頭は馬に似て馬ではなく、体はロバに似てロバではなく、角は鹿に似て鹿ではなく、草食の家畜ではなく、蘚苔だけを食べる。……(人が使う時に)呼ぶと来るし、使わない時には放し飼いにする。トナカイの性格はおとなしく、よく走り、良い馬と同じくすばらしい動物である」という。目の前のトナカイは確かにその通りである。角と頭、胴体、さらに足がそれぞれ鹿、馬、ロバ、牛と似ているものの、全体はどの動物とも似ていない。大変温和な動物で、少しずつ近づく筆者から逃げようとはせず、逆に優しい目でこちらを見つめている。「触ってもいいですよ」と隣にいる若いエヴェンキ青年は言いながら、一頭のトナカイの角を押さえてくれた。触ってみると、灰色の毛がふさふさして、実に可愛らしい動物だと思えた。

トナカイは蘚苔や地衣類を食べ、季節ごとに群れで移動

優しい目をしたトナカイ

する。人に慣れやすい動物なので、家畜化すると騎乗することもできる。昔からエヴェンキ族、オロンチョン族はトナカイを飼い馴らして、狩猟や移動の時に必要な乗物として森の中で使用していた。オログヤは、現在中国における希少動物であるトナカイの唯一の産地として、北京動物園をはじめ、全国各地の動物園にトナカイを供給している。トナカイ飼育の歴史は非常に古く、すでに唐代の歴史書『文献通考』「四裔伝」にその記録を見ることができる。それによると、バイカル湖の北五〇〇里に「鞠国」という国があり、そこには羊と牛がおらず、トナカイが国の家畜として車を引いたり、人を乗せたりしたという。

この歴史記録が象徴するように、昔の狩猟エヴェンキ人にとってトナカイは生活の中の交通手段の意味合いが大きかった。彼らは狩猟をしながら絶えず移動をしていたので、そうした移動生活を営む上で必要不可欠な運搬道具としてトナカイを飼育した。しかし現在では鹿茸の販売が、狩猟エヴェンキ人がトナカイを飼う最も重要な動機となっている。

鹿茸は鹿の袋角で骨化していない出たてのトナカイの角を切り取ったものであり、高い薬用価値を持っている。一九六〇年半ばにキカンからオログヤ自治郷へ移住してきた狩猟エヴェンキ人たちは、七〇年代まではまだ彼らの伝統的生活である狩猟を続けていた。当時の彼らは森で獲物を捕って自治郷へ売り、それなりの現金収入を得ていた。しかし八〇年代以後に入ると、急速な森林伐採に伴って獲物が急減し、同時に鹿茸の値段も高騰した。それで狩猟エヴェンキ人たちは狩猟からトナカイの放牧に切り替え、鹿茸の切取、販売を生活基盤とすることに転換した。かつて獲物を捕るために移動していた狩猟エヴェンキ人は現在、鹿茸の切取を行うために飼育しているトナカイの餌である苔を求めてトナカイと一緒に漂流するのである。

㈢　孟貴一四支における三つの家族とその住居

私が訪れた孟貴一四支には現在三つの家族が暮らしている。七四歳の女性マリア・ソ（馬利亜・索）とその嫁の王英が一家族。三〇代後半の青年ヴィカ（維加）、その姉リュウシャ（柳霞）、そして母バラジェイ（巴拉傑依）がもう一家族。さらに狩猟エヴェンキ人の中で唯一の鍛冶屋であるアンド（安道）とトナカイの放牧者ソレ（索熱）が三つめの家族を構成している。

彼らの住むテントは高さ約二メートルで広さ一二平方メートルほどの直方形である。テントは丈夫な防水布で作られているが、長年の風雨のためか、もとの白い色はすでに薄い黒に変わっている。性能が良く移動にも便利なこの文明の利器は、一九八〇年代に自治郷政府の援助で使い始めたものである。それまで狩猟エヴェンキ人は伝統的な住

左よりリュウシャ、アンド、ソレ、ヴィカの４人▶

◀トナカイを抱くソレ

まいである「ツウォロォズ」で暮らしていた。前に触れたように、ツウォロォズは松や白樺の棒を骨組みとして作られる高さ三・三メートル、直径約四メートルの円錐形テントである。骨組みの上に白樺や獣の皮などを掛ける。大変ユニークな形をしておりかつ実用的である。いまでも狩猟エヴェンキ人を宣伝する写真にしばしば登場するが、博物館以外でこれを見ることはもはや不可能である。

テントの中は意外に明るい。しかし、木の板と動物の皮で作られたベッド、暖炉、さらに小さい物置棚を除けば、これといった家具はなく、大変簡素な生活ぶりをうかがわせる。いや、テント暮らしになっても彼らは依然ツウォロォズ時代の狩猟エヴェンキ人の生活習慣を保ち続けていると言うべきかもしれない。テントの真ん中には火が燃え、北にはマル神が位置している。男性と女性はそれぞれ火の北と南に座ることとなっている。北のマル神の場所は主婦と一五歳未満の女子を除き、女子禁制である。

㈣　移住について孟貴一四支の人々に本音を聴く

ヴィカは北京中央民族大学からの客と分かると、とても親切に私をテントに招いてくれた。彼に「標準語が綺麗ですね」と褒めると、「中央民族大学で二年間勉強した」と誇らしげに話してくれた。この山奥にいながら、彼はジーパンをはき、アメリカ人歌手の顔と英語が印刷されたTシャツを着こなし、汚れているが都会の若者の雰囲気が漂う。彼の隣で古い人民服姿で恥ずかしそうな笑顔をしていたソレとリュウシャも、すらすら中国語の標準語を喋ることに、また驚いた。「長老のマリア・ソ以外は、みな多少中国語が喋れるよ」とリュウシャは言った。

エヴェンキ族は文字を持たないため、小学校から中国語教育が行われている。オログヤでの四〇年近くもの定住生活を経て、子供の中国語教育に関心を持つ親はかなり増え、それも今度の「村の引越し」を強く支持した理由の一つのようである。ヴィカの母バラジェイもそうした意見の持ち主である。実は自治郷の人民代表もしているバラジェイは教育熱心な母、祖母として村で知られている。ヴィカ、リュウシャの姉であるリュウバ（柳芭）は狩猟エヴェンキ人から誕生した初めての大学生であり、バラジェイはそれをとても誇りにしていた。[2]

ヴィカ兄弟の従兄弟であるソレは三〇代で、自分のトナカイを持たず、アルバイトでトナカイの放牧を手伝っている。移住について聞くと、彼は「私は賛成だが、トナカイは賛成なのかどうか分からない」とユーモラスに答えてくれた。詳しく話を聞いている間に、未婚の彼が町の近くに家具の揃った一軒屋を手に入れられれば、嫁も来るであろうという期待を持っていることを感じた。一方、彼は放し飼いに慣れたトナカイが小屋に入れられて、本当に大丈夫なのかという心配も確実に抱いている。四〇代後半のリュウシャは母の決断に任せると言いながら、定住村より森の生活を好む自分が果たして町の生活に適応できるかといった不安を覗かせた。

また、北京という大都会の生活を体験し、日本流にいえばUターンしてきたヴィカは微笑みながら、「我々は外の世界や村の生活より、やはりこの森の生活が一番合っているのだ」と言った。ソレと同じく、彼もやはりトナカイのことを心配している。長年蘚苔だけを食べてきたトナカイを飼育することになれば、餌も蘚苔から草に切り替えなければならない。オログヤ自治郷は餌の切替に成功したと言っているが、苔を好むトナカイに本当にいいのか、餌代をどのように拠出するのかなど、彼らの不安はやはり払拭しきれていなかった。

しかし、移住に伴う政府への銃の返納には、皆が意外とさっぱりしていた。というのは、この二〇年間、大興安嶺

地域における急激な開発で自然環境は大きく変わってきている。加えて、密猟が猖獗を極めたため、野生動物が大幅に減少し、今はほとんど獲物が取れない状態に陥っているからである。「でも銃を返す前に、いっぱい狩りをし、森の全てを捕ってやるぞ」と彼らが鋭い目付きで叫んだ時、私は狩人たちと森、獲物との引き離されてはならない強い共生関係の一端を垣間見たような気がした。

(五) 長老 マリア・ソ

孟貴一四支にある三家族のうち、マリア・ソ老人は鹿茸の販売で成功し、すでに八〇年代に現地随一の「万元戸」となっていた人である。現在、彼女は三〇〇頭以上のトナカイを持ち、一頭五〇〇〇元の市場価格で計算すれば、一五〇万元になる。これは大都会でも大金持だが、彼女のテントには鉄製のストーブ、二つのアルミ鍋、ベッドといった感じで、暮らしぶりは実に簡素そのものである。

老人は生涯を森の中で過ごしてきた。子供の時から父と狩猟生活をし、獲物を持って、ロシア人の商人と食料、布、お茶を交換したことを今でも覚えている。ロシアの影響を受けた彼女は簡単なロシア語を喋れるし、名前の「マリア」もロシアの影響である。共に暮らしている嫁の王英は穏やかな女性で、父親が漢民族で母親はエヴェンキ族である。

移住のことを尋ねると、地べたに座っている老人は何も答えず、ただ混濁した目で前方を見つめるだけであった。彼女はまだ息子の何鉄軍を失った悲しみに包まれている。森の生活環境は厳しいだけではなく、危険を常に伴うものでもある。彼女の息子、王英の夫は、前年狩猟中に亡くなったのである。「母はもちろん引越しをしたくない。この森は母の家、母の全てである」と、嫁の王英は教えてくれた。マリア・ソも自治郷に政府からの住宅をもっているが、トナカイにこよなく愛情を注ぐ彼女は、零下一五―二〇度の真冬でもほとんど下山することはなかった。

トナカイだけではない。マリア・ソの夫をはじめ、森には家族たちが安らかに眠っているのである。トナカイ、家族、先祖。森は彼女を生み、彼女を育ててきたのである。

長老 マリア・ソ

彼女にとって森はまさに人生そのものであり、魂それ自体である。もし移住に対して七四歳の彼女に投票権があったならば、間違いなく反対の一票を投じただろうと、私は想像した。

三　森を出たトナカイ

オログヤを訪れてから一年が経つ二〇〇三年の秋、予定より一年も遅れて、自治郷はようやく根河市の近くにある「三車間」というところへの移住を終えた。この移住に対して、中国政府は一五〇〇万元を投じ、行政区、生活区、商業区、トナカイ飼育場などを備える新しい定住村を作った。モダンな設備を持つ六二軒の家と一・六八万平方メートルを擁する四八か所ものトナカイ飼育場は中国少数民族優遇政策の象徴ともなり、国営テレビである中央電視台にも大々的に取り上げられた。

移住に先立って、彼らはまず祖先を祀った。それから銃を政府に上納した。最も大切な行事である移住はグループごとに行われた。新居のキーを貰い、喜んでいる第一組の人々の様子がテレビに映された。しかしまもなく、人々の予感は当たった。餌不足と新環境に慣れないトナカイが倒れたのである。このまま移住が失敗すると、無論少数民族政策それ自体の失政に繋がりかねない。トナカイの看病と草刈りのために、自治郷政府の職員が総動員された。第一組の移住者が動揺している最中に、パラジェイらの第二組は、三〇頭のトナカイを伴い山から降りてきた。新聞記者の前で政府に謝意を述べる彼女の姿は、どれだけ自治郷政府を勇気付けたものであろう。

こうして、一か月も続いた引越しの後、もとの「オログヤ自治郷」は無人村になり、五〇〇頭ものトナカイが新しい自治郷に集められた。しかし、「新天地」にマリア・ソの姿はなかった。彼女は自分のトナカイと共に森から一歩も動かなかった。これは政府にとっては民族政策への抗議を意味するものでもあろう。しかし今のところ、彼女のこうした抵抗は政府に容認されているようである。

また実は、自治郷の飼育場で期待されたトナカイの餌飼いがうまくいかなかったため、自治郷政府はついにトナカイを山へ戻すことを決意したと伝えられている。本稿執筆時（二〇〇三年末）に新しい定住村に移住した狩人たちは村から一六キロ離れた五峰山南潮査林場に三つの拠点をつくり、トナカイの放牧を始めている。しかし、これはトナカイの飼育を諦め、また放し飼いに戻ったのではない。自治郷政府は、すでに放し飼いに慣れたトナカイを自然にもどし、新しく生まれたトナカイを人工飼育するという「漸進的な放し飼い淘汰」の方針を実施し始めたようである。

おわりに

本稿の最初にも述べたように、筆者はもともと喫茶習俗の調査でエヴェンキ族の村を訪れた。しかし、二〇〇二年夏の旅は当初の予想を超え、私に多くの出会いをもたらし、さまざまなことを考える機会を与えてくれた。一九六五年にオログヤへ移住したエヴェンキ人を「狩猟」民族と形容するのはもはや不適切かもしれない。彼らは職業的には教師、幹部、獣医、会社員、農民など多種多様で、文化的にも、日常会話から服装、苗字まで無限に漢民族に近づこうとしている（近づけられているともいえよう）。トナカイは彼ら民族の最後の「砦」かもしれない。しかし、いま、その最後の「砦」も崩れようとしている。

注

〈1〉 日本では、エヴェンキ狩人のことを現在でも「ヤクート人」と呼ぶことがあるが、彼らの主張を尊重するため、本稿はこの名称を使わない。

〈2〉 一九九七年に、リュウバは「神の鹿」というエヴェンキ人の生活を描く映画で主演し、まさに民族の「スター」となった。しかし彼女は都会の近代的生活様式と生まれ故郷である森の伝統的リズムとの違いに悩まされ、アルコール中毒に陥っていた。筆者が二〇〇二年夏、孟貴一四支のテントを訪れた二週間後に、彼女は飲酒の末、故郷の川に溺れ悲しい最期を遂げた。この場を借りて彼女の冥福を祈りたい。

参考文献

秋浦 等『鄂温克人的原始社会形態』中華書局、一九六二年。
呂光天『鄂温克族』民族出版社、一九八三年。
孔繁志『敖魯古雅的鄂温克人』天津古籍出版社、一九九四年。
沈林『中国的民族郷』民族出版社、二〇〇一年。
孔繁志『敖魯古雅鄂温克人的文化変遷』天津古籍出版社、二〇〇二年。